

物語と関わりながら生きることへの『源氏物語』テキストの思索

The thought of *the Tale of Genji* to living while concerning a story

村山 太郎

MURAYAMA, Taro

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第6号 2021年

【原著論文】

物語と関わりながら生きることへの『源氏物語』テキストの思索

The thought of *the Tale of Genji* to living while concerning a story

村山 太郎*

MURAYAMA, Taro*

要旨

『源氏物語』テキストには、零落の佳女幻想と密接に関わる二人の姫君が登場する。末摘花と空蝉がそれだが、前者が笑われ、後者が称揚されるのは、零落の佳女幻想に対する関わり方が両者では異なるためである。この異なりは『源氏物語』テキストの思索を見通す手がかりになるものである。本稿は、零落の佳女幻想との関わり方についての、『源氏物語』テキストの思索の内実を明らかにし、その思索に学習者が参入する古文学習に向けて、教材化の要所を得ようとするものである。

キーワード：零落の佳女 『源氏物語』 末摘花 空蝉 古文学習

1. はじめに

王朝物語には零落の佳女が色好みによって見いだされ栄華を極めるという類型のお話が散見される。『うつほ物語』の若小君（後の兼雅）と俊蔭の娘や『落窪物語』の道頼と落窪の姫君、『源氏物語』の光源氏と若紫などをめぐるお話がそれである。『源氏物語』に登場する末摘花も故常陸宮の娘として荒廃一途の自邸で不遇を託つ折に光源氏によって見いだされたので、この姫君と光源氏を描出しようとする『源氏物語』テキストに、そうした類型のお話が影響を与えていたであろうことは想像してもよいことだろう。その証拠に、邸内から聞こえてくる琴の音を耳にし零落を象徴する屋敷の荒廃ぶりを目にした光源氏に、

いといたう荒れわたりて寂しき所に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづき据ゑたりけむ名残なく、いかに思ほし残すことなからむ。かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれ。^①

と想起させてもいる。先学が指摘するように、ここで光源氏が思う「昔物語」とは『うつほ物語』「俊蔭」巻における若小君と俊蔭の娘の物語や『大和物語』一七三段といった「寂しいあばら屋に、琴を弾く姫君とそれを聴きつけた貴公子が邂逅すると言う話形」を指している^②。このように末摘花と光源氏をめぐる物語には色好みで零落の佳女を見だし麗しい恋を繰り広げる先行物語が強く響いている。

では、『源氏物語』テキストの書き手はこの手の類型の恋の物語をどのように眺めていたのだろうか。そのような問いを立てると、単に共感・同感できるお話として肯定的に眺めていたわけではないと言えそうだ。というのも、光源氏は末摘花と関係を持った後に気付いて後悔するのだが、彼女は、長く美しい髪を除けば、「昔物語」に登場するような佳女とは決して呼べないような容貌の持ち主だったからだ。『源氏物語』テキストは、「昔物語」通りの「あはれなる」恋の展開を期待させるに十分な

* 日本語日本文学科専任講師

舞台を整えながらも、その期待の高まりと恋のライバルの出現、そしておそらく長い髪のせいで、きちんと容姿を確認せずに末摘花と関係を持ってしまう光源氏を描き出すのである。三田村雅子が指摘するように、「こうした末摘花の物語は、髪の長いことのみをもって「美人」の条件にしてきた当時一般の末端肥大的な関心のありかたに対する源氏物語の痛烈な皮肉であり、パロディ」である⁽ⁱⁱⁱ⁾。更にこの指摘に本論の立場から付け加えると、「あはれなる」恋の舞台装置（荒廃した屋敷や琴を弾く姫君、長く美しい髪）さえ整ってしまえば、闇雲に恋に突っ走ってしまう「昔物語」の色好みたちへの批判でもあったろう。

以上のように、末摘花と光源氏をめぐる物語には、『源氏物語』テキストの、色好みたちのものの方や考え方に生きる男への批判的なまなざしが窺える。一方で、色好みたちと関わる女を『源氏物語』テキストはどう眺めていたのであろうか。色好みの活躍する物語が世を覆った時代である。その相手役として登場し、色好みと麗しい恋をしてみせる零落の佳女の物語もまた、少なくはなかったろうし、その読者の中にはそのような物語に憧憬の念を抱く、例えば後に現れる孝標の娘のような者も沢山いただろう。零落の佳女幻想との関わり方は、それが流通する文化に生きる者にとって問いの対象となっていたはずである。

本稿は、『源氏物語』テキストに見える末摘花を手がかりにして、当時沢山流通していたであろう零落の佳女の物語と人との関わり方を『源氏物語』テキストがいかに眺めていたのかを明らかにし、その思索の深まりをはかるために『源氏物語』テキストが注視したと思しきもう一人の姫君、空蟬を取り上げ分析することで、教材化に至る要所を析出しようとするものである。

2. 物語の始まり

末摘花の容姿を見て知った光源氏は早々に「あはれなる」恋の相手から末摘花を排除する。

「かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし。げに心苦しうたげならん人をここにすゑて、うしろめたう恋しと思はばや。あるまじきもの思ひは、それに紛れなむかし」と、思ふやうなる住み処にあはぬ御ありさまはとるべきかたなし」と思ひながら、…（後略）…。
（「末摘花」巻三五頁）

末摘花の容姿を確認して失望しきりの光源氏が末摘花邸を後にする際、改めて屋敷の荒廃ぶりに目をやりながら思ったことが上掲である。「かの人々の言ひし葎の門」とは「帚木」巻で左馬頭の語った「寂しくあばれたらん葎の門」のことで、そこに住む佳女との恋の期待をも語っていたので、「かやうの所にこそは」「あはれなることどもありけれ」と光源氏に教えた「昔物語」と同じく「いといたう荒れわたりて寂しき所」を指す。だが、末摘花邸は「あはれなる」恋にはこれ以上ない「住み処」なのに、そこに住む姫君はどう考えても「あはれなる」恋に「あはぬ御ありさま」なので、彼女に替わる「心苦しうたげならん人をここにすゑて」、我を忘れるほど恋に耽溺したいと光源氏は思う。舞台装置はほぼ完璧なので、そのような舞台で展開する完璧な物語作りのために、それを著しく妨げる異物だけ取り除いて相応しい人物を選んで登場させようと思うのである。事実を度外視してお話のような現実を創り出そうとするタフな男主人公を『源氏物語』テキストがどのように眺めていたのか興味は尽きないが、ともあれ光源氏にとって末摘花は「あはれなる」恋に「あはぬ御ありさま」なので恋愛の対象外である。だが、その一方で、この姫君との邂逅には故常陸宮の遺志（「故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべ」（「末摘花」巻））のようなものも感じられるので、以降、光源

氏にとって末摘花は庇護の対象としてある一人の姫君という位置づけになるのである。

ところが、光源氏にとって単なる庇護の対象に過ぎないのに、当の末摘花は光源氏の恋人然として振る舞い、亡くなった父親譲りと思しき尚古趣味を爛漫に発揮する。

陸奥国紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深う染めたまへり。いとよう書きおほせたり。歌も、

「唐衣君が心のつらければ袂はかくぞそぼちつつのみ」

心得ずうちかたぶきたまへるに、包みに衣箱の重りかに古代なる、うち置きておし出でたり。…

(中略) …今様色のえゆるすまじく艶なう古めきたる、直衣の裏表ひとしくこまやかなる、いとなほなほしうつまづまぞ見えたる。「あさまし」と思すに、… (後略) …。(「末摘花」巻三八頁)

上掲は、歳末に末摘花が元日の贈り物として光源氏に衣装と和歌を贈る場面である。流行色を取り入れた衣装だが「艶」もなく「古めきたる」もので仰々しく、光源氏をして「あさまし」と言わしめる。和歌はというと、古風な「唐衣」という枕詞の導出語「着る」が二句目の「君」の「き」の音と掛かっていることが光源氏にはにわかには分からない(「心得ずうちかたぶきたまへる」)ほど強引な作り方で、当世風の和歌の屈指の詠み手である光源氏にとって馴染みの薄いものであったようだ。後に明らかにされるのだが「唐衣」は伝統的な和歌の作法をきちんと書き残した父の教えを守って使用したようで、その後も枕詞「唐衣」から導出語「着る」に繋げる作風は末摘花の定番となっている。衣装の趣味にまで父親の薫陶が響いていたのかは判然としないが、父親の遺した調度品や屋敷にひどく執着する末摘花の姿は繰り返し語られるので、父親が選んで買い与えた衣装の様式にもこだわっているのだろう。こうした贈り物や和歌に目を通した光源氏は思わず「なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖に触れけむ」(「末摘花」巻三九頁)と末摘花の赤い鼻を強調しつつ独詠している。好きでもないのにどうしてこんな姫君と付き合ってしまったのかというおおよその歌意で、零落の佳女だとばかり思い込んで恋の浪漫に浮き足だってしまったことは忘れたかのような詠みぶりではあるが、光源氏にとってやはりもう末摘花は恋の対象ではない。だが、末摘花にとって光源氏との「あはれなる」恋は終わってしまったラブロマンスなどでは決してない。亡き父の思い出が残る荒廃した屋敷で過ごしていると、「昔物語」に語られる零落の佳女と色好みの物語のごとく、当代随一と呼び声高い貴公子が言い寄ってきて、通い始めたのである。まだ末摘花にとって零落の佳女の物語は始まったばかりなのだろう。事実、末摘花が零落の佳女と自らを重ね光源氏を待ち続ける姿は「蓬生」巻に確認できる。

3. 色好みの救済

「蓬生」巻には、光源氏の援助が途絶え困窮の一途を辿る屋敷で、父の遺した邸宅や調度品を守り光源氏の救済を一途に待つ末摘花が描かれる。

光源氏との出会いから、訪れはまれながらも経済的に十分な援助を受けられていた末摘花は、光源氏が須磨・明石の地で自主蟄居するに及んで誰からの援助も得られなくなってしまう。お仕えする者たちが目先の糊口を凌ぐために邸内の格式ある調度品などを手放そうと申し出ても、亡き父が買いそろえたのだからの一点張りで聞く耳を持たない。そのため、もともと荒廃した屋敷だったが、より一層繁茂した庭の野草目当てに馬牛を「放ち飼ふ総角」(「蓬生」巻頁)が現れるほど、悲惨な様相を呈するに至る。時勢が移り変わって光源氏が帰京したという噂が流れても、どうも忘れられているよう

である。「たびしかはらなどまで喜び思ふなる、御位改まりなどするを、よそにのみ聞く」（「蓬生」巻頁）ばかりで、何の音沙汰もない。「げに、限りなめり」（「蓬生」巻一四四頁）と自分に対する関心が光源氏から全くなくなってしまったことを思いもするが、他方で頼みに思う気持ちも捨てられない。

「さりとも、あり経ても思し出づるついであらじやは。あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身はうくて、かく忘られたるにこそあれ、風の伝てにても、我かくいみじきありさまを聞きつけたまはば、かならずとぶらひ出でたまひてん」と年ごろ思しければ、おほかたの御家居もありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ぎしたまふなりけり。（「蓬生」巻一五〇頁）

もし光源氏が少しでも自分の窮状を聞き付けてくれたなら、きっと訪ねだしてくれるだろう（傍線）と、「年ごろ」信じていた末摘花が描き出されている。また、邸内の調度品を手放さなかった理由には、亡父の遺志に加えて光源氏再訪の備えのためでもあったことがここで明らかにされる。光源氏帰京の噂が聞こえてきた時期の前後には、裕福な叔母（大弐の北の方）が夫の任地（筑紫）で世話をしようとして申し出ていたのだが、それを頑なに断り続けたのも父の遺した屋敷への執着だけではなく、光源氏が連絡しやすいように動くことを嫌った上でのことだったのかも知れない。いずれにせよ、「あはれに心深き契り」を光源氏と交わした姫君であるという自負が、長い窮乏生活においても末摘花に光源氏の救済を確信させ「心強く同じさまにて念じ過ぎ」すことを可能にさせたようである。確かに、佳女の苦境を色好みは見過ごせない。

「その御母おはせぬこそは、いと心苦しくあはれまさらめ。わが本意には、いとはなやかならざらむ女の、物思ひ知りたらむが、かたちをかしげならむこそ、唐土、新羅まで求めむと思ふ。…（中略）…さて心に任せでおはすらむよりは、わたくしものにて、ところに任せたまつらむ」。^(iv)

上掲は『落窪物語』に見える弁の少将の言葉である。弁の少将は、散逸物語『交野少将物語』の男主人公で、色好みの代名詞として広く人に知られた交野の少将と世間から比せられるほどの色好みとして登場する。上掲の場面はその弁の少将が実母を亡くした落窪の姫君への関心を語るもので、そこでは、実母という後見の無い落窪の姫君の不如意が「いと心苦しくあはれまさらめ」とされていることが分かる。というのも、「いとはなやかならざらむ女」とは悲境故の「物思ひ」を味わい尽くしているので恋の情趣を取り交わす相手として相応しく、加えて「かたちをかしげ」であるのなら、どこまでも探し求めたいというのが弁の少将のような色好みたちの「本意」であったからである^(v)。こうして、色好みたちは姫君の苦境に好んで介入するのである。結果として、色好みによって見いだされた零落の佳女が、はたして窮状から救い出され、栄華を獲得するという物語は様式化されたお話として流通することになる。そもそも光源氏が末摘花に関心を寄せたのも、故常陸宮の娘が不遇に甘んじているという噂がきっかけである。そんなふうが始まったお話の顛末が姫君の救済と栄達にあるなら、先の末摘花の確信は光源氏個人の誠実さに依るものでももちろんあるのだろうが、色好みの特徴的な考え方（「本意」）をなぞったものでもあったろう。だとすると、光源氏が窮状を耳にすれば必ず救済してくれるに違いないという末摘花の確信は、光源氏にとって大切な姫君であるという自覚によるものでもあるし、色好みにとっての零落の佳女を自ら任じることによるものでもある。

音泣きがちに、いとど思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬと見えたまふ御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし。（「蓬生」巻一五〇頁）

举例は、光源氏の救済を確信する末摘花が語られた直後に見えるものである。窮状に耐えて光源氏の訪れを「音泣きがちに、いとど思し沈み」つつ待つ姿は、まさに「物思ひ」を深めながら色好みの訪れを一途に待つ姫君そのものである。だが、『源氏物語』テキストはそのような末摘花の、佳女ならざる逸脱のしるし（「ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬ」）に言い及ぶことを忘れない。末摘花が自らを重ね合わせようとする零落の佳女と、末摘花自身との径庭を強調することで、その径庭に思い至らない末摘花を笑いものにしようとするのである。意地悪な言い方ではあるが、こうした笑いの発想にも、零落の佳女として色好みとの恋の浪漫に生きようとする末摘花が描き出されていることを確かめ得るだろう。

以上のように『源氏物語』テキストは零落の佳女幻想を生きる末摘花を描き出すわけだが、一方で、この幻想が末摘花にとってどれほどの強度を持つものであったかを試すかのように、物語通りにはいかない現実と末摘花を出会わせることで彼女を追い詰めていくのである。

「さても、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふは、心憂の仏、菩薩や」とつらうおぼゆるを、「げに、限りなめり」とやうやう思ひなりたまふに、…（後略）…。（「蓬生」巻一五一頁）

帰京後の光源氏が催した盛大な法華八講に参加した兄が光源氏を「仏、菩薩の変化の身にこそものしたまふめれ」（「蓬生」巻一五一頁）と絶賛する言葉を聞いて、末摘花は上掲のように思う。信じる衆生を救済するはずの「仏、菩薩」だとするなら、「かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふ」のは、なんと「心憂の仏、菩薩」であることよ、と。なかなか思い出してくれない光源氏に焦れて抱いた感慨だろう。光源氏の関心が失われてしまったことの現実味が末摘花には徐々にせり出し始めているのである（「げに、限りなめり」）。極めつけは、末摘花の引き取りを申し出ている裕福な叔母の働きかけがある。この叔母は、姪のお世話というのは建前で、実は生前の姉や姉の夫（常陸宮）から受けてきた侮りの恨みを、遺児である末摘花を取り込んで我が子の使用人にするので晴らそうと考えていた。だから、どうしても末摘花を建前の側から説得して夫の待つ任地に連れ出したいので、末摘花から唯一の話し相手である乳母子（侍従）を取り上げ孤立させたり、末摘花の頼みにする光源氏の側にどれほど関心がないかを理路整然と伝えたりするのである。

「ただ今は式部卿宮の御むすめより外に心分けたまふ方もなかなり。昔よりすきずきしき御心にてなほざりに通ひたまひける所どころ、みな思し離れにたなり。まして、かうものはかなきさまにて藪原に過ぐしたまへる人をば、心清く我を頼みたまへるありさまと尋ねきこえたまふこと、いと難くなむあるべき」など言ひ知らするを、「げに」と思すもいと悲しくて、つくづくと泣きたまふ。（「蓬生」巻一五三頁）

叔母は、自主蟄居の身から晴れて帰京した光源氏が、「式部卿宮の御むすめ」（紫の上）をだけ愛しみ、その他の「なほざりに通ひたまひける所どころ」には見向きもしないようになっていることを述べる。光源氏が「なほざりに通ひたまひける所どころ」から足を遠のかせていることは別の箇所でも光

源氏側の事情を伝える叙述として語られているので、叔母の言い分には作為がなく、おそらく末摘花にとっても心当たりのあることだったろう。そのような情報を踏まえた上で、叔母は、ましているのかいないのか分からないほど零落を窮める姫君が、自分を信じて待っているはずだなどと思ひ起こして訪ね出すことはまず無いと的確に言うのである。これには「げに」と認めて泣くより他ない末摘花の姿が描かれている。

このようにテキストは末摘花を追い詰めるわけだが、だからといって、叔母の誘いに乗って遠い異境の地に旅立つわけでも、糊口を凌ぐための何かの手立てを考えるわけでもない。侍従も去り、光源氏の訪問もない荒廃を窮めた屋敷で一人、亡父を恋いつつ光源氏の訪れをずっと待ち続けていた末摘花を描出するのである。

姫君は、さりともと待ち過ぐしたまへる心もしるくうれしけれど、いと恥づかしき御ありさまにて対面せむもいとつつましく思したり。（「蓬生」巻一六〇頁）

相変わらず愁いに沈む末摘花が昼寝の夢に亡父を見て、亡き父を偲ぶ歌を独り詠じる。折しも、花散里のことを思い出し訪ねようとしていた光源氏が道中で「見し心地する木立」（「蓬生」巻一五六頁）に気付き隨身の惟光に命じて探りを入れさせていた。上掲は、出会った頃よりも一層「形もなく荒れたる家」（「蓬生」巻一五六頁）に住む末摘花を思いやり、ほったらかしにしていた「わが御心の情けなさ」（「蓬生」巻一五九頁）を光源氏が反省して、末摘花と対面した折に見えるものである。そこでは、光源氏からの連絡がないという現実を、光源氏の救済に寄せる信頼の側からずっと否定し続け、今やっとその思いが叶ったことを喜ぶ末摘花が語られる。あれほどままならない現実と出会っても、末摘花は色好み・光源氏による救済のリアリティーを手放さなかったようだ。零落の佳女幻想に足場を置き、幻想通りには行かない現実を認めたとしても決してその現実を受け入れない。そのような心の在り方が、「心強く同じさまにて念じ過ごす末摘花の頑固さにあったことを『源氏物語』テキストは伝える。こうして、光源氏の須磨・明石下向から数えて四年ぶりに末摘花は光源氏と再会を果たす。その一途さが光源氏から認められ、この再訪の後、再び光源氏の手厚い庇護が始まり屋敷は設え直され逃散していた使用人たちも光源氏の威光にすがって舞い戻ってきた。さらにその二年後、光源氏の別邸であった二条東院に迎え取られるのである。

二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。対面したまふことなどはいと難けれど、近き標のほどにて、おほかたにも渡りたまふに、さしのぞきなどしたまひつつ、いと侮らはしげにもてなしきこえたまはず。（「蓬生」巻一六五頁）

二条東院（「東の院」）は本邸（六条院）の近くにあったので、ことさらに対面はなかったけれども別邸に用事があった際などに光源氏はついでとして末摘花の元を訪れていたようである。結果として、末摘花は零落の佳女が色好みに見いだされ、困難を経てついには色好みの屋敷に引き取られ不自由なく暮らす物語を完成させるのである。だがこの成功体験は末摘花が笑われるきっかけとして作用するもののごとく見える。

4. 物語のおわり

色好みに引き取られてめでたく結ばれる零落の佳女と二条東院で過ごす末摘花との異なりは、容姿

を除けば、男主人公の扱い方の程度にある。端的に言えば、最愛の妻として扱われる零落の佳女に対して光源氏の愛情が全くない末摘花という違いである。二条東院に引き取られた姫君は末摘花と空蟬（一時期、花散里）であるが、空蟬が既に出家しているように別邸に暮らす姫君は光源氏にとって基本的に庇護の対象でしかない。光源氏にとって濃やかに愛情をかけなければならないのは本邸に住まわせた妻たち、取り分け紫の上や明石の御方である。付け足すと、空蟬に対しては脱俗という境界を飛び越えかねない危うい想いを光源氏は抱いているのだが、末摘花に対しては全くない。一途な想いの対価として、男君の愛情を根拠とする手厚い庇護があると先行する「昔物語」は教えるが、庇護だけが与えられる形骸。それが二条東院に住む末摘花の現実である。ところが末摘花にはこの現実が分からない。

皆、御返りどもただならず。御使の禄心々なるに、末摘、東の院におはすれば、いますこしさし離れ、艶なるべきを、うるはしくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の桂の袖口いたくすすけたるを、うつほにてうち掛けたまへり。御文には、いとかうばしき陸奥国紙の、すこし年経、厚きが黄ばみたるに、「いでや、賜へるは、なかなかこそ。

着てみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖を濡らして」

御手の筋、ことに奥よりにたり。（「玉鬘」巻一八八頁）

光源氏から贈られた新年の衣装のお礼をする末摘花の様子が語られる場面である。そこで光源氏が目にしたのは、「山吹の桂の、袖口いたくすすけたる」衣を末摘花から褒美として与えられ肩にかけたまま帰参した使者と、使者が渡した末摘花からの手紙であった。語り手が「末摘、東の院におはすれば、いますこしさし離れ、艶なるべき」と言うように、六条院の妻たちならまだしも、二条東院（「東の院」）で世話をされている姫君であれば使者に与える褒美はもう少し控えて趣向を凝らすべきなのに、仰々しくも衣、それもみすばらしい衣なのだが、そのようなものを褒美に与えるのである。これは、何ごとも型通り「うるはしくものしたまふ人」という末摘花の古代性に依ることかも知れないが、一方で和歌には男の訪れがないことを恨む女の心情が定番の枕詞「唐衣」とともに詠み込まれてもいる。このように、光源氏にとって庇護の対象に過ぎない姫君が、妻然として堂々と自分を恋慕う内容の和歌を詠んで寄越してきたのだ。これには、光源氏はみっともないやら腹が立つやらでひどく気恥ずかしい思いをさせられ、末摘花の出しゃばりは手に負えないとさえ思うのである（「さかしらにもてわづらひぬべう思す」（「玉鬘」一八九頁））。

とはいえ、庇護だけが与えられる扱い方には光源氏の薄情を恨めしく思うこともあったが、むしろ手厚い庇護が長年続いているという事実が、光源氏への親しみを深めさせたようである。

御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじくはなやかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳ひきつくろひ隔てたまふ。なかなか女はさしも思したらず、今はかくあはれに長き御心のほどを穩しきものに、うちとけ頼みきこへたまへる御さまあはれなり。（「初音」巻二〇三頁）

六条院で初めて迎えた正月の中頃、光源氏は二条東院に離れて住まう末摘花を訪問する。改めて末摘花の様子を目にした光源氏は、あれほど美しかった黒髪に白髪が増えていることに気づき直視できない。また元日用に贈った立派な衣装は末摘花に似つかわしくなく、下襲一枚だけで寒そうである。

さらに目に入れたくないけれども見ずにはいられないほど「はなやかなる」「御鼻の色」。かれこれ、目にしては気の毒なので「ことさらに御几帳ひきつくろひ隔てたまふ」（二重傍線）のだが、末摘花には男君の「隔て」を一向意に介する様子はない。それというのも、絶えることなく続く光源氏の庇護に誠実な愛情（「あはれに長き御心のほど」）を見だし満足して信じ切っていたからだ（傍線）。手厚い庇護という実績の方からありもしない男君の情愛を確かなものとして実感しているのである。従って、光源氏の「隔て」や「常陸の宮の御方は、人のほどあれば心苦しく思して、人目の飾りばかりはいとよくもてなしきこえたまふ」（「初音」巻二〇三頁）という思いには決して気づかない。むしろ、出会った頃には返答もできなかった末摘花が、光源氏に「あまりうちとけ過ぎたり」（「初音」巻二〇四頁）と思わせるほど多弁になり親しみを深めているのである。そのような「うちとけ頼みきこへたまへる御さま」（傍線）を評して語り手が「あはれなり」と述べているが、その言葉には痛々しさへの憐憫の情がきつと籠もっている。

以上のように『源氏物語』テキストは光源氏によって救済された末摘花が現実から乖離し続ける姿を描き出すのであるが、庇護の対象に過ぎないという現実に気づけない末摘花にとって、光源氏の愛情こそ現実味のあるものであったろう。どれほど思い通りにならない現実と出会っても、零落の佳女よろしく色好みの救済を待ち続けたら最後には本当に救われたからだ。おそらく、末摘花だけは次に挙げるような異なる世界に生きているのだろう。

かくて後、おとど、一条殿にあからさまにもおはせず、異御心なし。大人二十人ばかり、うなみ・下仕ひなど、いと多く召し集めて、使はせ奉り給ふ。夜昼、昔のことを悔い、行く先のことを契り、あはれに飽かず思さるままに聞こえ尽くし給ふ。北の方、御歳三十に少し足らぬほどなる、御かたちただ今盛りにて、思ほすことなくておはするままに、光を放つやうに見え給ふ。⁽⁶⁾

『うつほ物語』の俊蔭の娘（＝「北の方」）は若小君（＝「おとど」）に見いだされながらも離別して、様々な困難を経た後に男君と再会を果たし都の屋敷に迎え取られる姫君である。上掲は、そのような姫君が男君の屋敷で暮らし始めた姿を語るもので、いわばハッピーエンディングに見える零落の佳女の姿である。その姿は驚くほど末摘花と重なることが分かる。確かに『蓬生』の巻で再会を果たした光源氏は自らの怠りを悔い（「昔のことを悔い」）、将来の末永い庇護を約束していた（「行く先のことを契り」）。また、二条東院にはきちんと使用人が用意され（「大人二十人ばかり……」）、末摘花は「ただ心の願ひに従ひたる住まひ」（「初音」巻二〇三頁）に安住していた（「思ほすことなくておはする」）。ただ零落の佳女が生きる安寧の世界と末摘花の現実との違いは男君の情愛の有無だけだ。だから、俊蔭の娘に代表される零落の佳女を自らに重ね、辛苦の末にほとんど同じような現実を得た末摘花が、男君から愛される女君（二重傍線）という世界に生きていたとしても、現実にはそのようなことは全くないのだが、不思議なことではないのだろう。

とはいえ、無邪気に男君の愛情を幻視する末摘花の姿には手に負えないとする光源氏の非難や語り手の憐憫といった負の評価が貼り付いている。物語の世界に生きる末摘花は幸せだろうが、その姿は滑稽である。その滑稽さをもたらした原因が、結局は色好みによって救済されたという強烈な成功体験であるとするなら、一概にその体験は成功とは呼べないだろう。生真面目に零落の佳女幻想を信じて待つ末摘花が、幻想と限りなく近い現実に迎えられるせいでより強固にその幻想を信じるようになったと考えられるからである。光源氏の救済はそのような負の体験としてもあったのである。

零落の佳女幻想を信じて生きた末摘花は、そもそも彼女自身を取り巻く現実と出会うことが妨げら

れていた。例えば、零落の佳女のごとく光源氏の救済を物思いに沈み待つ末摘花の姿に、わざわざ語り手が赤い鼻を付け加える箇所などがそれである。そして、たとえ現実の方が幻想を裏切り光源氏にとって恋の対象外であるという事実と出会ってしまうようなことがあった（「げに、限りなめり」としても望まぬ現実として排除できた（「さりともと待ち過ぐしたまへる」）。さらに光源氏の救済という体験が加わってより信念が強化されたのである。これが末摘花と零落の佳女幻想との関わり方であるが、その姿のほとんどが光源氏や語り手の言葉によって笑いや憐れみの対象となるのである。そのように末摘花を語ることで、『源氏物語』テキストは零落の佳女幻想との関わり方を問ひかけ、常に幻想の側に軸足があることの現実感の乏しさを応答として呼び掛けているのだろう。

5. 始まらない物語

『源氏物語』テキストにおいて、色好みとの恋の浪漫に惹かれる姫君は末摘花ひとりだけではない。空蟬にもそれを認めることができる。さらにまた、零落の佳女幻想との空蟬の関わり方は結果として穏やかな暮らしをもたらしている。その姿が他の登場人物や語り手から批判されることはないで、先の末摘花が失敗例だとすると、いわば成功例と見做せる人物である。両者を並べて分析することは、零落の佳女幻想との関わり方について『源氏物語』テキストがいかに思索を展開しているのかがよく理解できるだろう。では、空蟬のそれはどのように描出されているのだろうか。

「雨世の品定」で色好みの先達から恋の手ほどきを受けた若き光源氏が空蟬と出会ったのは、方違えで赴いた紀伊守邸にちょうど空蟬が来合わせていた折のことである。「雨夜の品定」において中流の姫君の魅力や零落の佳女との恋の興趣深さを知った光源氏にとって、紀伊守邸の様子はまさに中流階級で（「かの中の品にとり出でて言ひし、この並ならむかし」（「帚木」巻七六頁））、そこに来合わせていた空蟬も零落の末に後妻に落ち着いたと知っていた（「思ひあがれる気色に聞きおきたまへるむすめ」（「帚木」巻七六頁））ので俄然興味が湧く。今は年老いた伊予介の後妻として中流階級におさまる空蟬だが、亡父が健在であった折は入内を見据えて大切に育てられた姫君だったのである。こうして光源氏はその晩、空蟬の寝所に忍び込むのである。

（空蟬）「いとかくうき身のほどの定まらぬありしなごらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへまどはるるなり」。（「帚木」巻八三頁）

寝所に忍び込んでかき口説く光源氏に対して空蟬は、伊予介と結婚する前の、父を喪って進路未定の状態であったなら光源氏の懸想も分不相応な結婚に期待できて嬉しかったろうが（傍線）、今は伊予介の妻であるからこのような関係は困ると伝えて拒絶し通す。とても良識のある拒絶の口上と見受けられるが、実はそうでもない。傍線で示したように、空蟬は零落の佳女幻想が伝える色好みとの恋の魅力が分かっているだけでなく、この晩以降、熱心に言い寄ってくる光源氏の想いを前にして、十分にその魅力に惹かれてもいるからだ。

- ① 心の中には、「いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしょうもやあらまし。しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむ」と、心ながらも胸いたく、さすがに思ひ乱る。「とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむ」と思ひはてた

り。「帚木」巻九〇頁)

- ② つれなき人(空蟬)もさこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、とり返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、
空蟬の羽に置く露の木隠れて忍び忍びに濡るる袖かな(「空蟬」巻一〇六頁)

挙例①は紀伊守邸での一晩から数日経って光源氏が空蟬目当てに再訪した際に見える空蟬の心情で、挙例②は挙例①からさらに数日経って光源氏から送られてきた和歌を目にした折の空蟬の反応である。それぞれに、零落の佳女幻想に惹かれる空蟬の様子が分かる箇所には傍線を付し、伊予介の妻という現実に戻り始める空蟬の様子が分かる箇所を括弧に入れて示している。見られる通り、零落の佳女幻想の磁力に抗えず、空蟬には深刻な葛藤が生じている。だが、空蟬は常に伊予介の妻であるという現実に戻り始めることで零落の佳女幻想に取り込まれるのを踏みとどまるのである。これは、光源氏の訪れがないという現実を、零落の佳女幻想の側から排除し続けた末摘花と比べると正反対の心の在り方だろう。

もちろん伊予介の妻である空蟬にとって零落の佳女時代に戻ることはできない。実際に空蟬も「とり返すもの」(②)ではないと今の自分の現実の側から光源氏の「いとあさはかにもあらぬ御気色」(②)を打ち消すのではあるが、今のこの時点で光源氏との関係を拒絶することは時期の違いで説明できることではないだろう。光源氏の想いを拒絶する(「しひて思ひ知らぬ顔に見消つ」(①))空蟬の決心に揺らぎが生じている(「胸いたく、さすがに思ひ乱る」(①))のは確かなことだ。過去には戻れないながらも光源氏との興味深い恋を体験したいと本心から思ったら、それがどれほど「をかし」きことか零落の佳女幻想を媒介にして知っているのだから、「ほど知」(①)り顔に光源氏の想いを受け入れてしまいかねない状態にあると見てよいだろう。加えて、時間を巻き戻すことはできないが、零落の佳女幻想を偽装できることは、後悔しきりの光源氏が末摘花邸を目にした時に言ってもいた。物理的に戻れるかどうかという問題ではなく、零落の佳女幻想が教えるような色好みとの「あはれなる」恋を空蟬自身が願うか否かという問題である。その問題に、伊予介の妻という自分の現実を思い起こしながら、過去と今とにけじめを設けることで答えようとする。そのような空蟬が描き出されているのだろう。

それにまた、現実の我が身が誰かの妻であること自体に、色好みとの「あはれなる」恋に生きることを否定できるだけの力はない。蔵人少将を夫と定めながらも、独身時代に関係を持った光源氏から想いをほのめかす色っぽい和歌が送られると、だったら行動に移してよと言わんばかりの和歌を返した軒端萩の例もある(「夕顔」巻)。軒端萩にとって色好みとの恋の情趣は光源氏との関係を通して既知のものであるから、それがまた体験できるのならあっさりとそちらを選び取るのである。この時に、蔵人少将の妻であるという軒端萩の現実は何の歯止めにもおそくはなっていない。それに、空蟬に確認できた、独身時代だったらまだしもというようなけじめもきつくない。むしろ、色好みとの恋の浪漫が勝ったために蔵人少将の妻であるという現実を一向に意に介さなかった姿は、末摘花のそれと近似する。その意味で、この時の軒端萩は末摘花と同じように現実感に乏しい姫君として描出されたものと理解できる。軒端萩の先の返歌を目にした光源氏が、空蟬のなかなか靡かない様(「うちとけで向かひゐたる人」(「夕顔」巻一五五頁))を対置した上で、無心に碁に熱中して騒いでいた軒端萩の姿(「何の心ばせありげもなくさうどき誇りたりしよ」(「夕顔」巻一五六頁))を思い出すのは示唆的である。軒端萩は夢中になれるものに飛びついたらそれしか見えなくなる姫君だったようだ。ともあれ、空蟬が光源氏の懸想を受け入れるか否かという問題は、伊予介の妻であるという現実が決定でき

ることではない。零落の佳女幻想が伝える色好みとの恋の浪漫に賭けて色好みとの「あはれなる」恋を選ぶか、伊予介の妻である現実を選ぶかといった、当人の選択の問題である。

零落の佳女幻想の教える色好みとの情趣深い恋の魅力を常に過去の自分に送り返し、現実の自分との関わりを断ち切る空蟬の描出。これは、零落の佳女幻想との関わり方についての、『源氏物語』テキストの一つの応答である。色好みとの恋の浪漫は抗えないほどの魅力があるけれども、現実と浪漫の間に何らかのけじめをつけなければ、浪漫にだけ生きることになる。そのように読者に呼びかけているのだろう。

ただし、『源氏物語』テキストの思索の展開という点から空蟬の姿を改めて確認すると、上記の応答に止まるものではなかったことに気づく。というのも、伊予介の妻という現実を選び、光源氏との恋を拒絶した空蟬にとって、その決断は決して満足できるものではなかったからだ。光源氏からの誠実な恋情（「いとあさはかにもあらぬ御気色」(②)）を前にすると、零落の佳女幻想に取り込まれそうになり（「ありしながらのわが身ならば」(②)）つつも、独身時代は独身時代であって今は今だとけじめをつける（「とり返すものならねど」(②)）。だけれども、どうしても「忍びがた」い(②)とする空蟬の姿がそれである。空蟬にとって選び取った伊予介の妻という現実には意に添うことばかりではない。むしろ老齢の夫には不快な思いすら感じている。そのような空蟬の前に、若き貴公子が現れたのである。その貴公子との恋の浪漫に生きることは拒絶したものの、やはりどうしても諦めきれない思いが残るのである。光源氏との関係を拒んだ空蟬は、実体としては伊予介の妻なのだが、心情はどっちつかずである。事実、それは文通だけは取り交わすといった以後の光源氏との関係にも表れている。このように『源氏物語』テキストは、現実だけに生きるのでもなく、浪漫にだけ生きるのでもない複雑な女君を描き出してもいるのである。

幻想と現実との間で宙吊りになる空蟬。零落の佳女幻想との関わりを経て、彼女が立つに至ったのは場所ともいえないような場所である。伊予介と死別後、継子紀伊守からの懸想を嫌って出家した空蟬は、上述のように文通だけは途絶えず光源氏とやりとりしていた関係から、二条東院に引き取られ光源氏の庇護を受ける。そのような尼姿の空蟬が光源氏から「いにしへよりも、もの深く恥づかしげまさり」（「初音」巻二〇六頁）と評されているが、これは、心情的にどっちつかずではありながらも若き光源氏の懸想を拒み通そうとする空蟬に、光源氏がある種の気高さを感じていたことをも伝えよう。気高さを以て差し出される空蟬の立ち位置は、零落の佳女幻想と女性との関わり方について思索する『源氏物語』テキストの到達点の一つと見てよいだろう。

6. おわりに

どこにも足場を置かなかった空蟬の、「いにしへよりも、もの深く恥づかしげまさり」る気高さを確認した光源氏は、すぐさま「かばかりの言ふかひだにあれかし」（「初音」巻二〇六頁）と末摘花を批判している。正月の挨拶に末摘花と対面した直後だったからだ。その際に光源氏に見せた末摘花の姿は既述の通りだが、それは、親愛の情をひたすらに光源氏に示す馴れ馴れしい姿であった。先の光源氏の批判は、どこか一つに足場を定めて安住する末摘花の、気高さの不足を言うものであったろう。また、この光源氏の批判は、改めて空蟬と末摘花という恋愛関係にない二人の女君が二条東院に引き取られていることを気づかせる。全く異なる両者の来し方を振り返るように『源氏物語』テキストが促すため配置しているかのようである。本稿はその導きに促されるまま零落の佳女幻想との関わり方という点で両者を俎上にのぼせて考察したわけだが、行論に示した通り『源氏物語』テキストは先行する様式化された物語を模倣するだけの者には厳しい。むしろ複雑に関わる者にこそ気高さを認める。

先行する様式化された物語は特定の振る舞い方や感じ方、思考の仕方を読者に教えてくれる。その意味で先行する様式化された物語とはものの見方・考え方の別名でもある。日々、種々多様な物語に取り巻かれながら、それとの関わり方を意識的にも無意識的にも決定しているであろう学習者にとって、『源氏物語』テキストが注ぐ、末摘花や空蝉それぞれへのまなざしはどう映るのだろうか。その出会いの意義は少なくはないだろう。

本稿に残された課題は、いかなる場面を教材として選び取り、いかに授業として形にしていくのかである。取り分け末摘花をめぐる笑いには教室で扱うには不適切な部分も含まれるので慎重にならなくてはいけない。また稿を改めて教材化の実際と授業実践を報告したい。

注・引用文献

- (i) 小学館完訳日本の古典『源氏物語』、小学館、1983年10月31日、「末摘花」巻14頁。これより以下、本論文では『源氏物語』本文を頻繁に引用するので、『源氏物語』に限り出典掲出は論文本文引用末尾に巻名とページ数を示す。なお、引用中、表記を私に改めた箇所がある。
- (ii) 上原作和〔校注〕「末摘花物語（全文収録）」、『人物で読む『源氏物語』 - 末摘花』（9）、勉誠出版、2005年11月10日、15頁。
- (iii) 三田村雅子「黒髪の源氏物語 - まなざしと手触りから - 」、『源氏研究』（1）、翰林書房、1996年4月20日、49頁。
- (iv) 『落窪物語』（『新編日本古典文学全集』（17）、小学館、2004年12月10日）、91頁。
- (v) 日向一雅『源氏物語と漢詩の世界 『白氏文集』を中心に』、青簡舎、2009年2月28日、26頁。
- (vi) 『うつほ物語』（室城秀之〔校注〕『うつほ物語 全 改訂版』、おうふう、2001年10月20日*初版1995年10月15日）、53頁。